

【平成16年度専修学校を活用した若者の自立・挑戦支援事業】

|       |   |         |  |
|-------|---|---------|--|
| 事業名   | 専門学校とIT系企業の連携による日本版デュアルシステム教育訓練プログラムの研究開発 |         |  |
| 学校法人名 | 鶴学園                                       |         |  |
| 学校名   | 広島工業大学専門学校                                |         |  |
| 代表者   | 鶴 衛                                       | 担当者・連絡先 | 林 哲也・TEL:082 - 295-5111<br>E-mail:hayashi@hitp.ac.jp |

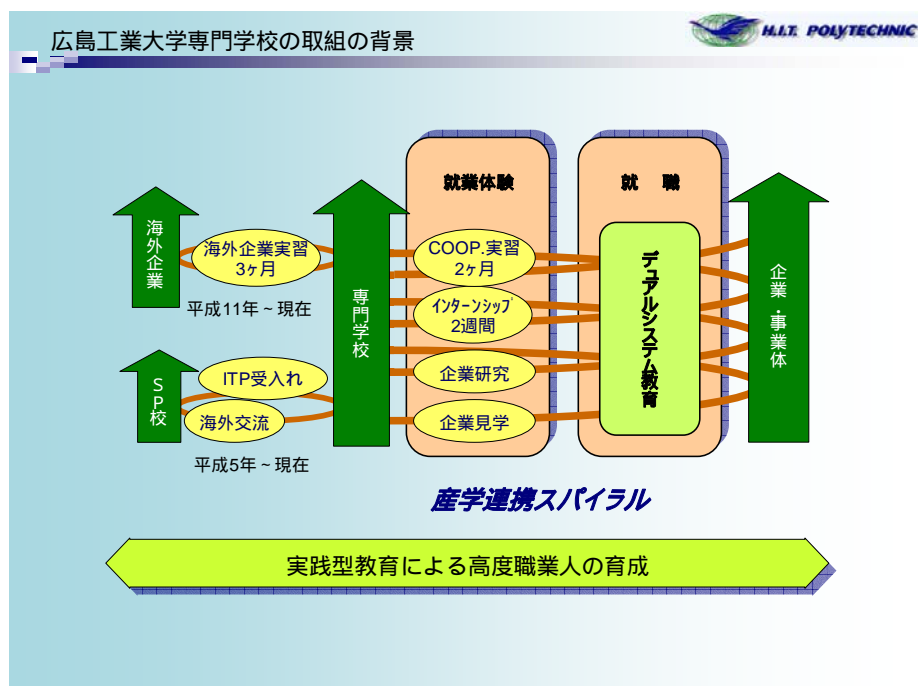
< 事業の概要 >

情報通信技術（IT）の急速な進展と高度化、利用分野の広がり等により、企業と学校教育における人材の需要と供給にミスマッチが起きている。この状況を解消し、効率的に即戦力性の高い人材を育成するためには、企業と学校が連携した日本版デュアルシステム教育の導入が効果的であると考えられる。そこで、望ましい日本版デュアルシステムのあり方について調査研究を行うとともに、インターネットサービスを主業務とするIT系企業と専門学校が連携し、実証的に、即戦力性の高いIT技術者を育成するための教育カリキュラムについて研究開発を行った。

< 成 果 >

( 1 ) 研究の背景

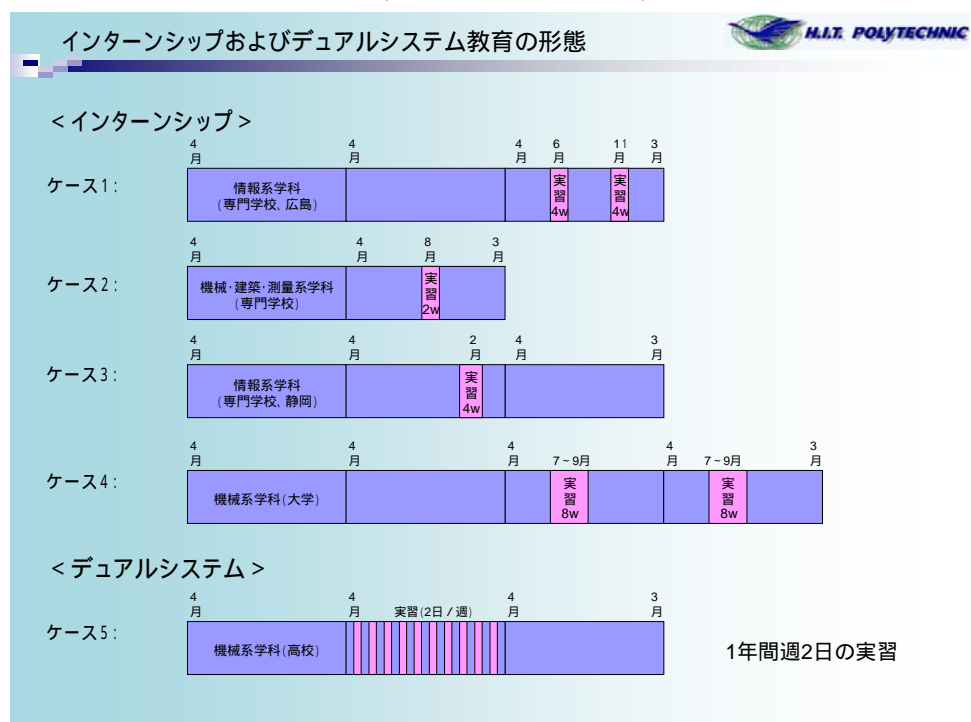
本プロジェクトでは、産学連携（インターンシップ）の延長線上にデュアルシステムを位置づけ、学校と企業との連携のあり方を模索する形で研究に取り組んだ。



産学連携スパイラルとデュアルシステム

( 2 ) インターンシップに関する調査

インターンシップの形態について、大学と専門学校、高等学校について調査を実施。



インターンシップは、2週間から長期で2ヶ月までのものがほとんどである。インターンシップの内容・レベルから次の3つに分類した。

見学  
 研修、就業体験  
 就労、企業貢献

(3) インターンシップとデュアルシステムの違い

国立教育政策研究所の坂野先生の講演により、日本のインターンシップとドイツのデュアルシステムの違いをまとめた。

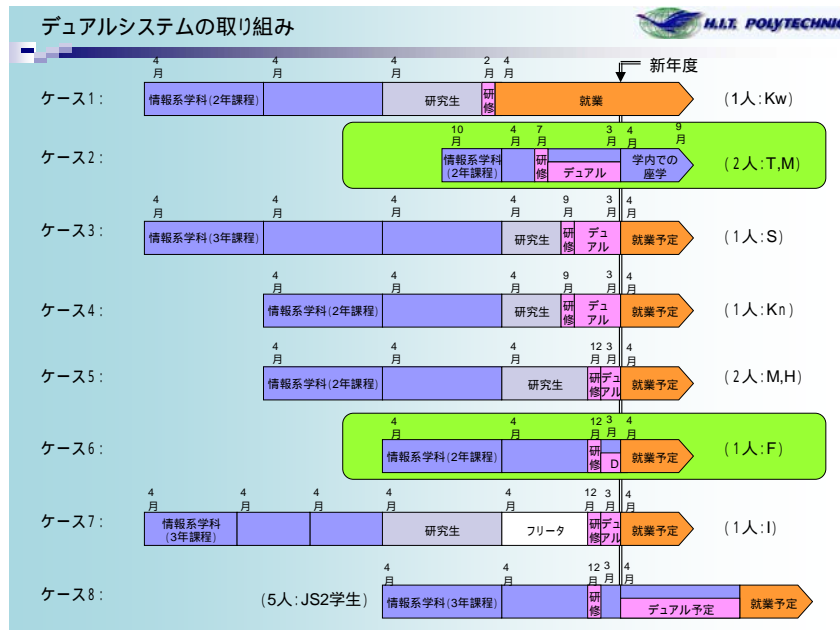
| カテゴリ       | 日 本       | ドイツ           |
|------------|-----------|---------------|
| 主 体        | 学 校       | 企 業           |
| 教育内容       | 学習指導要領、学校 | 各州学習指導要領      |
| 訓練席の提供     | 学校が企業に依頼  | 企業が自主的に提供     |
| 訓練席の割振り    | 主に学校が行う   | 企業と訓練生との契約    |
| 訓練内容       | 未定型       | 会議所等で規定、企業を拘束 |
| 訓練指導者      | 現場社員      | 指導員（マイスター等）   |
| 訓練指導者の資格   | 資格なし      | 資格必要          |
| 両者のコーディネート | 主に学校      | 会議所等          |

日本とドイツのデュアルシステムの違い

結果、デュアルシステムは、就業を前提とし、学校の役割を「いかにしてキャリア形成の入り口に立たせるか」にあると考えた。

(4) IT 企業とのデュアルシステムの実際

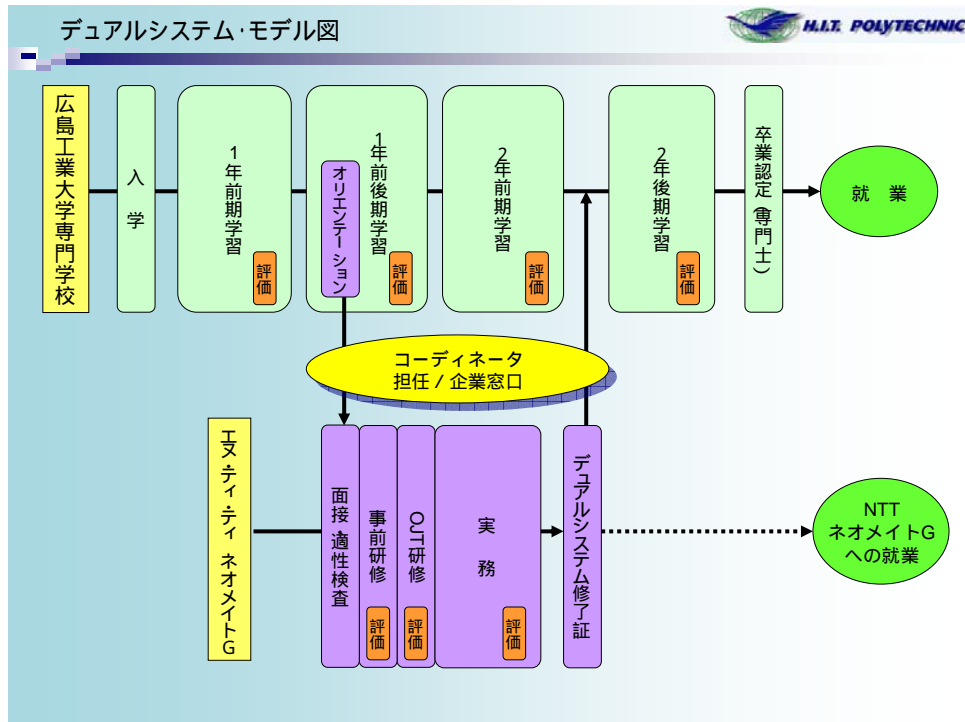
IT 企業（NTT ネオメイトグループ）とのデュアルシステムにおいて、興味を持つ学生に内容を説明し、本人の納得の上で実習（実務）に参加させ実証的に取り組んだ。  
 在学生 3 人、在学生で研修のみ 5 人、研究生 4 人、卒業生 2 人を派遣。



デュアルシステム教育の取り組み

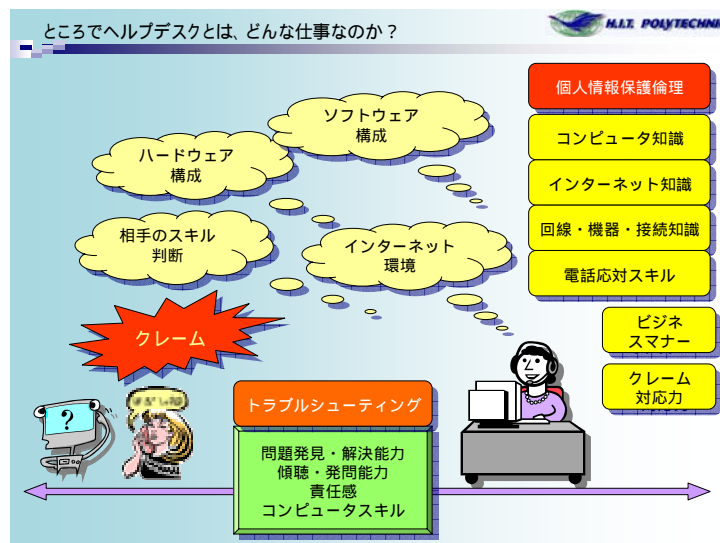
(5) 実施形態の例

希望者に対してオリエンテーションを行い、企業に派遣する。



(6) 実習内容

インターネットの接続に関するヘルプデスクを担当。



修得した技術

- コンピュータやインターネットに関する実践的知識
- 電話対応スキル
- ビジネスマナー
- クレーム対応能力
- 問題発見、解決能力

(7) デュアルシステムで職業観を醸成

職業意識について、企業体験の無い学生、インターンシップ(就業体験型)参加学生、

デュアルシステム（就労型）参加学生に対して、アンケート調査を実施。

デュアルシステム経験者 11 名、インターンシップ経験者 13 名、経験のない学生 30 名。

### アンケート内容

#### 就業に対する現在の考えについて

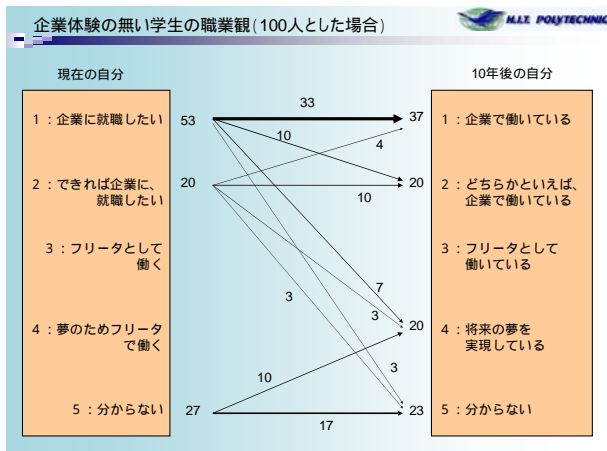
- 1：是非、企業（社員、公務員等）に就職したい
- 2：どちらかといえば、企業に（社員、公務員等）に就職したい
- 3：フリーターでもかまわない
- 4：将来の目標のため、フリーターで働く
- 5：分からない

#### 就職に関する、10年後の自分の予想について

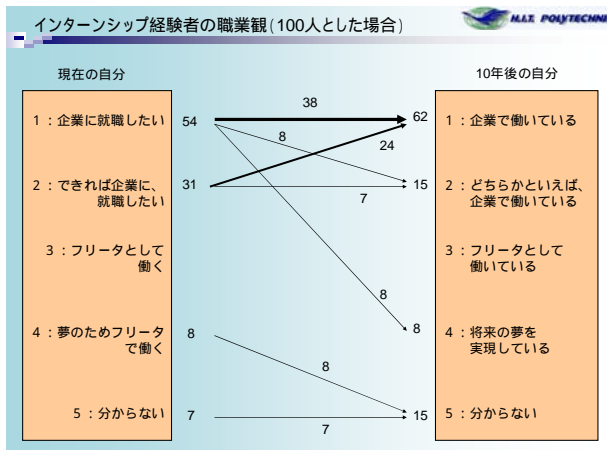
- 1：企業（社員、公務員等）で働いていると思う
- 2：どちらかといえば、企業で働いていると思う
- 3：フリーターとして働いていると思う
- 4：将来の目標を実現していると思う
- 5：わからない

アンケートの回答者は 54 名であるが、回答者を分類し、100 名に換算した移動グラフを示す。結果、未経験者 < インターンシップ経験者 < デュアルシステム経験者の順で、確かな就業観を持つことを確認できた。デュアルシステムを経験している研究生には、フリーターを希望していた者がいたが、その意識が見られなくなっている。

### 実習経験が無い者

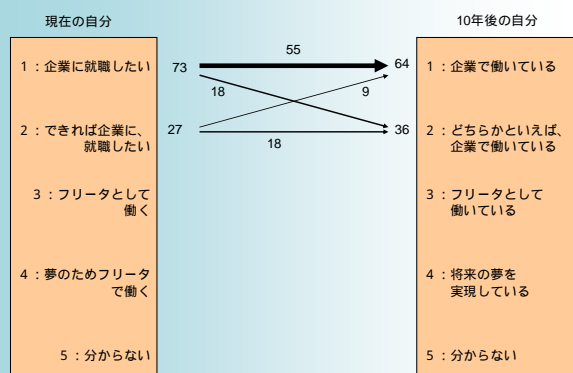


### インターンシップを経験している者



## デュアルシステムを経験している者

デュアルシステム経験者の職業観(100人とした場合)



### (8) 実施における成果と課題

#### デュアルシステムの成果と課題



|    | 成 果   | 課 題  |
|----|---|--|
| 学生 | ネットワーク実務の知識・技術<br>問題発見・解決能力<br>コミュニケーション能力(傾聴・発問)<br>ビジネスマナー<br>実力を伴う、資格取得(.comMaster)<br>収入が得られる | 授業と仕事の頭の切り替え<br>学習時間の制約<br>学校・企業との窓口の明確化<br>学校情報の十分な提供<br>業務情報の十分な提供   |
| 学校 | 即戦力性の高い人材の育成<br>学生の就業意識の醸成<br>クラス・学科・学内の活性化<br>企業連携の充実<br>就業体験(インターンシップ)から<br>実務力養成(デュアルシステム)へ    | 個人情報保護法への対応<br>安全への対応(保険等)<br>評価システムの構築(学校・企業評価)<br>コーディネータの配置(学校)<br>企業開拓の限界<br>教育スタンスと企業スタンスの整合<br>キャリアカウンセリングの実施<br>途中リタイヤのフォロー対策 |
| 企業 | 人材の育成・確保<br>採用機会の増大<br>職場の活性化<br>学校とのパイプ作り  | コーディネータの配置(企業)<br>デュアル学生としての配慮<br>デュアル学生向け研修の検討<br>学校のカリキュラムとの調整<br>(一般業務、個別業務)  |

デュアルシステムは、学生が実際に企業で働くことが前提となるため、学校の教育スタンスと企業のスタンスの整合をはかることが重要となる。

### (9) 今後の課題

デュアルシステムを実現するには、学校と企業の共通の教育プログラムが必要である。

IT系であれば、ITSSなどが参考となる。

また、学校、企業、学生の間コーディネータを位置づけ、学生サポートを図るためにキャリアカウンセリングを配置することが必要となる。

